

「ハナミズキに桜の雨を」

【登場人物】

・みずき

・桜

※ .. 状況説明、場所

N .. ナレーション（回想か否かにかかわらずすべて現在の年齢の声で）

S E .. 効果音

【本編シナリオ】

プロローグ

①幼稚園・出会い

※みずきと桜の幼少時代。幼稚園

S E .. 雨

S E .. 幼稚園部屋内ガヤ

N

「確かにこの日は、雨が降っていたんだったと思う。新しい幼稚園に転園してきたあたしは、一通りクラスメイトとお喋りしたあと、まだ挨拶していなかつたある女の子に目を向けた。一人で席に座って、クレヨンで何かを熱心に描いている」

S E .. みずき、クレヨンで絵を描く

N

「あたしもお絵かきは好きだ。当時、小学校に上がる前に友達を百人つくろうと意気込んでいたあたしは、これを機にその子に話しかけることにした」

S E .. 桜、みずきに近づく

桜
みずき
「こんにちは」
「……」

桜
みずき

「彼女は黙ったまま、あたしを見上げた。けれど目は合わない。いつたいじーを見ているんだろう」「

「あたし、桜。あなたのお名前は？」

「……みずきです」

「みずきちやんね、よろしく！ ねえ、それ、何描いてるの？ あたしも一緒にいい？」

SE・みずき、桜の腕を引く

「わつ……な、なに？」

「座つてください」

「え？」

「そこの席」

「ああ……そこ？」

SE・桜、みずきの右側の席に座り向かい合う

「これでいい？」

「そのまま動かないで」

「う、うん」

SE・みずき、画用紙にクレヨンで描く（継続）

「……もしかして、あたしのこと描いてるの？」

「動かないでください」

「むー……」

桜N

「自分が絵のモデルになるのは嫌じゃない、むしろ嬉しい。ただ、退屈だった。目の前の彼女はただひたすら無言で、画用紙にクレヨンを走らせていく。途中で一度だけ目が合った。真っ直ぐな瞳に、あたしは思わず吸い寄せられそうになつた」

「……ねえ、ちょっとだけ見せて」「あ……」

みずき

S E .. 桜、身を乗り出す
S E .. クレヨンの音終わり

桜
N

「(驚きと感動)」

「このときからあたしは、すべてを決めていたんだと思う」「

1. ずっと一緒に

①美術室・デッサン

※現在、高校の美術室。椅子に座つて動かない桜と、彼女を描いているみずき

S E .. スケッチブックにデッサンしているみずき（継続）

みずきN 「窓の外を見つめる桜は、夕暮れの光を受けながら、憂いを帯びたような表情を浮かべていた。彼女の短い髪を描きながら、相変わらず端正な顔立ちだと感心する。私は彼女を見つめて、その姿を正確に捉えていった。スケッチブックの中の桜が、次第に本物と同じ美しさを纏っていく——」

S E .. 描く音終わり

みずき 「桜、体勢辛くないですか？」
桜 「大丈夫、続けて」
みずき 「わかりました」

S E .. 描く音再開（継続）

みずきN 「幼稚園で出会つてから、随分と時間が経つた。桜はいつも傍にいてくれる。今もこうして私の右側の席という定位置に座り、美術室で週二回、デッサンのモデルを引き受けってくれている。黙つたままの桜は、他の人から見れば可憐で神秘的だ。けれど私はその中身を知っている。きっと今頃頭の中は、夕飯のことでいっぱいだろう

う

桜 「（小さな溜息）はあ……」
みずき 「どうかしましたか？」
桜 「最近お肉あんまり食べてないなって思つて。でも今夜はハンバーグなんだつて。
だから思いを馳せてるの」
みずき 「ハンバーグに？」
桜 「ハンバーグに」
みずき 「……桜がいつもの桜で安心しました」
桜 「どういう意味よお」
みずき 「そのままの意味です」

「みずきは謎だなあ」

「昔からこんな感じですよ」

「……確かに。ほら描いて描いてー」

「描いてますよ。もうすぐできます」

みずき

みずきN 「普段あまり人と話さない私と、人気者の桜。周囲から距離をとられる」との多い

私に、彼女はいつも変わらず接してくれた。そんな彼女を、私は誰よりも信頼していた。私には桜が必要だ。だからこそ、考へてしまう。桜が私だけの桜であればいいのに、と」

※時間経過。座っている二人。桜、伸びをする

桜
みずき

「はー、終わつたー」

「今日もありがとうございました。いい練習になりました」

桜
みずき

「なら良かつた。あ、ところでもさ……そっちのクラスって英語の小テストやつた？」

同じ先生だよね」

桜
みずき

「はい、ちょうど今日」

桜
みずき

「えつ、問題どんなの出た!?」

桜
みずき

「(たしなめる) ……桜」

桜
みずき

「えへへ……だつて、英語苦手なんだもん」

桜
みずき

「そんなこと言つて、成績悪くないじやないですか」

桜
みずき

「平均点よりは上いきたいの、親にも色々言われるし。でも英語は毎回苦労するん

だよね……」

「だからといって、問題を教えるわけにはいきません。それにあの先生のことです、

クラスごとに内容を変えてると思いますよ」

桜
みずき

「前から思うんだけど、そういうのって問題のレベルに差、出ないのかな」

桜
みずき

「……どちらも教科書を元に作つてるんですから、そんなに違いはありません。つ

べこべ言わば諦めて勉強してください」

桜
みずき

「みずきの意地悪ー！」

桜
みずき

「貴女はなんやかんやちゃんと勉強するつてわかつてますから」

桜
みずき

「うー……そう言わると……」

桜
みずき

「だから、私が手を貸さなくとも大丈夫ですよね？」

桜
みずき

「……信じてくれるのはいいんだけど……もうちょっと心配してくれてもいいの

になあ

みずき

「心配、ですか?」

桜

「だつて、今までずっと同じクラスだつたんだよ？ それが高校最後に別々になつちやつたんだから。目の届かないところであたしがピンチになつたらどうするの？ 現に今ピンチだし」

「それはそうですけど……貴女なら大丈夫だつて思つてますし、何かあれば相談してくれれば……。それに、お昼休みはいつも会つてゐるでしょう？ こうして放課後だつて」

桜 「そうだけどお……」

桜 「隣のクラスなんですから、会おうと思えばいつでも会えます。私たち、友達じゃないですか」

桜 「……う、うん」

※何か言いたげな桜。しかしすぐに表情を戻す

桜 「みずきは、これからまたデッサン？」

桜 「ええ。今日は時間ぎりぎりまでやるつもりです」「そつか」

SE.. 桜、椅子から立ち上がる

「じゃあ、あたしは退散しよっかな。夕飯までには帰るつて言つちゃつたし」「わかりました。ハンバーグ、楽しみですね」

桜 「すつごく楽しみ！」

桜 「ふふ、お気をつけて」

桜 「また明日ね！」

SE.. 美術室を出ていく桜

※みずき、スケッチブックを見つめる

みずき 「……」

※絵の中の桜に描き足し、髪を長くする

SE.. みずき、線を描く

みずきN 「絵の中の、桜の髪を描き足す。出会つた頃、彼女の髪はもつと長かつた。だけど

小学五年生の頃、だろうか、彼女は突然髪を切った。それも私と同じくらい短く。私はその姿を見てショックだったのを、未だに覚えていてる」

S E .. 鉛筆を置く

みずきN 「それ以降、桜が髪を伸ばすことはなかった。髪型なんて個人の好みだということはわかっている。けれど私は、髪の長かった頃の桜を忘れられなかつた。それだけ美しかつたのだ」

S E .. みずき、自身の髪に触れながら

みずき 「(眩き)でも、私が勝手に求めているだけなのかもせんね……」

②昼休み・桜の気持ち

※数日後、昼休み。屋上に並んで座つてゐるみずきと桜

S E .. 桜、みずきの前の弁当箱を開ける

桜 「はい、今日のお弁当。みずきの好きなゴボウ入り肉団子入れておいたよ。あと卵焼きも」

みずき 「ありがとう、桜。いつも作つてもらつてすみません」

桜 「いいの、好きでやつてるんだから。さ、食べて食べて！」

みずき 「では、いただきます」

桜 「あたしも、いただきまーす」

S E .. みずき、箸を手に取りおかずをつまむ

みずき 「(食べて) ……美味しいです」

桜 「良かつた！」

「桜は本当に料理上手ですね」

みずき 「人並みだよ。けど、みずきに作るようになつてちょっと上達したかも。みずきつ

て昔から集中すると、食べるのも寝るのも忘れるんだもん。だからせめて栄養つけてもらわないとね」「

みづき

「ふふ……私のこと、いっぱい考えてくれてるんですね」

「ど、当然よ。この間だつて、コンクールの作品描いてるとき、大変そうだつたし」「（心配おかけしました。でも、今年が頑張りど）ころなので……」

「……そうだね」

「私、立派な画家になりたいんです。だからまず、このコンクールで本選に行つて、金賞を取りたい」

「みづきならできるよ。だつて凄く上手いもん、それに頑張り屋さんだし」「ありがとうございます、桜」

「というわけで、これも食べて。アスパラのベーコン巻き～」

「桜も自分の食べてください。まだ口つけてないでしよう？」

「これから食べるつて。まあまあ、どうぞ」

S E：桜、箸を手に取りおかずをつまむ

みづき
「あ、ちよ、ちよつと、自分で食べますから……」

桜
「遠慮しないの。はい、あーん」

みづき
「う……あ、あーん……（食べる）」

桜
「どう？ 美味しい？」

みづき
「（噛んで飲み込む）……美味しいです」

桜
「えへへ、やつたあ！」

S E：みづき、ハンカチで口元を拭く

みづき
「（口元を拭いて）……なんだか、子ども扱いされてる気分です」

桜
「え、そうなの？ それはちよつと……子どもだね」

みづき
「ど、どういうことですか？」

桜
「ううん、みづきが鈍いのなんて今に始まつた」とじやないから、大丈夫」

みづき
「（焦り）えっ、え……？」

桜
「あはは、まあいいじやない。みづきはみづきのまままでいいよ」

みづき
「（困る）全然わかりません……」

S E：桜、ペットボトルを開けて口に含む

桜
「（飲んで）……ねえ。みづきはさ、進路どうするの？」

みづき
「え？」

SE：桜、ペットボトルの蓋を閉めて置きながら

「あたしは……これからもみずきとずっと、一緒にいたいな」

「……」

桜 みずき
「だって、一ーンに小さいときから一緒だったんだよ？ 今更離れるのもなんか、って感じじゃない？」

「……でも、それは子どもだからできたことでもあると思います」

「……」

桜 みずき
「私たちとはいつか大人になる。それも、そう遠くない未来に。だから、桜には自分のやりたい道に進んでほしいです」

桜 みずき
「……そつか。みずきはちゃんと、子どもを卒業するんだね」

「桜もですよ」

桜 みずき
「うん……頑張るよ」

みずきN 「桜はそれから黙ってしまった。一緒にいたい……嬉しい言葉だけれど、私は東京の美大に進みたいと考えている。ずっと傍にいてくれた桜には、もちろん感謝しかない。けれど、今後もそれが続くのは申し訳ないし、桜のためにはならないだろう。そう思うと、なぜか胸の奥がちくりと痛んだ」

2. 摆て、流れる

①公園・告白

みずきN 「二日後、コンクールの結果が出た。私は無事に地域予選を一位で通過し、本選に進むことができた。正直、かなりほつとした。実は提出した絵に、自信がなかったのだ。だってあの絵は……私が本当に描きたいものじやない気がしていたから。……でも、だつたら私は、いったい何を描きたいんだろう」

※週末。公園を散歩しているみずきと桜

SE：公園の環境音

SE：二人の足音

みずき 「（呟き）人物、風景、静物……」

桜 「それでね、文化祭の準備まだ全然進んでなくて。大道具の材料、昨日大慌てで買
いに行つたんだけど……」

みずき 「……」

桜 「聞いてる？ みずき」

みずき 「えっ？ あ……すみません」

桜 「どうしたの、真剣な顔して。散歩飽きた？」

みずき 「いえ、ちょっととぼうつとしてて」

桜 「考え方？」

みずき 「ええ、まあ……」

桜 「へえ、何考えてたの？」

みずき 「大したことじやありません。そう、きつと難しいことじやないはずなんです。多
分……」

桜 「……何かあつたら、いつでも相談してくれていいんだからね？ あたしで役に
立てるかどうかわからんないけど、できる限り力になるから」

みずき 「ええ、ありがとうございます、桜。私も貴女のためになることなら、極力する
つもりです」

桜 「ほんと？ ジやあ数学の小テストの範囲教えて！」

みずき 「即答しないですよ！」

桜 「それは駄目です」

みずき 「それは貴女のためにならないでしよう。ちゃんと勉強してください」
（小声）「もう、せつかくの土曜日なお小言なんてつまんなーい」

みずき

「聞こえますよ……ところで、英語の小テストは乗り切れたんですか？」

「もちろん！ ちやーんと勉強したからねー」

「さすがです。やればできるのに……」

「やるまでが大変なの。しなきやいけないって思うと、それが重荷になつて余計にできなくなるつていうか」

「……気持ちは、わかります」

「でしょ？ だから……」

「だからこそ、それができる桜を尊敬しています」

「うつ……褒め言葉で封じ込めるのするい……」

「ふふ」

SE：桜、立ち止まる。続いてみずきも同様に

「そうだ、みずき！ コンクールどうだつた？」

「あ……ええ、本選に進めることになりました」

「ほんと！？ すごーい、おめでとうー！ なんだ、言つてくれれば良かつたのに！」

「すみません、すっかり言い忘れてました。桜のおかげなのに」

「あたしのおかげ？」

「ええ、いつもデッサンに付き合つてくれてるでしょ？」

「あたしがしたのはそれだけだよ。予選突破できたのは、みずきの努力と実力」

「……ありがとうございます」

「本選は違う絵を提出しなきやいけないんだよね？ 何描くの？」

「……実は……何を描けばいいのかわからなくて」

「もしかして、さつき考えてたのってそのこと？」

「ええ、恥ずかしながら」

「そんなことない、悩んで当然だよ。けど、みずきでもそういうことあるんだね。いつもさらさら描いてるから意外かも」

「(苦笑交じりに) 自分でもびっくりします」

「うーん……何を描くか、か……やっぱり、みずきの好きなものがいいんじゃない？ そのほうが描いてるとき楽しそうだし」

「好きなもの……」

みずきN 「そう言われて、今まで描いてきたものを思い出した。教室から見える外の景色、四季折々の花が一斉に咲く空想上の世界、夢で見た虹色の海……どれも私が好きなのだ。だけど、描いていて一番喜びを感じるのは……」

みずき　一(咳き)……桜、だつたんですね……」

「(呟き)…………桜、だつたんですね…………」

S E .. 桜、ブランコのほうへ走っていく

桜
みすき！ フランコあるよ！ やろー！
「えっ？ あ……（仕方ないと笑う） もう……」

「みづき！ ファンコあるよ！ やろー！」
「えつ？ あ……（仕方ないと笑う）もう……」

「よいしょ、つと……」

S E .. 桜、ブランコに座る

「久々に乗ったなあ。ちよつと小さいかな？」

「見るからに子ども用ですかね」
「あこっこ、まだ子供らなりのこ……成長つて浅告二
みづき

也口之犹つニシテハノミテシテノミテ

「あつ、でもいい感じかも。ねえみづき」「ええ? いいんですけど……えいっ」

S E ..みずき、桜に近づいて背中を押す

「わっ……！ ちよつ、強いつて！」

「あつ、
でも……高いのもいい……」

※ ながき、グラノロで翻して、ひる姿を見上げる

「 そは、ダラノヨボ以合、ミタク

۱۳۲

元気いってはいた幼稚園児みたいで可愛いで

みずき
一違いますよ。……でも、そのうち風で、どこかに飛ばされてしまいそうにも見え

ます」

「……」

「……すみません、変なことを言いました」

「あたしはどこにも行かないよ。みずきが傍にいてくれる限り」

「つ……」

「……ねえ、みずきも一緒にやろ？」

「え？」

「ブランコ。小さいときよくやったじやん」

「そうですけど、でももう高校生ですよ？」

「……」にブランコで遊んでる高校生がいるんですが「

「……私もやるんですか？」

「いいでしょ、たまにはつちやけても。ほらー！」

「……わかりました」

SE：みずき、桜の隣のブランコに座る

みずき
「……つと……」

SE：みずき、土を蹴ってブランコが揺れ出す（継続）

みずき
「う……な、なんだか恥ずかしい……」

みずき
「ふふ、これでみずきも共犯」

みずき
「別に悪いことなんてしてないでしょ？」

みずき
「高校生がやるなんてー、って思つてたでしょ？」

みずき
「だからって『共犯』は大袈裟です。……（ぼそっと）思つたより、悪くないです

ね」

みずき
「楽しいよね、改めて遊ぶと。覚えてる？ 小学生のとき、あたしがブランコに立つて乗つてたらうつかり手、放しちやつて。けど前まわりして擦り傷だけで済んだの」

みずき
「そんなこともありましたね。あのときは本当にヒヤヒヤしました。桜がふわっと宙に浮いて……一瞬空を飛んだのかと思つて。怪我は酷くなくて安心しましたけど、そのあと先生やご両親から凄く怒られてましたね」

みずき
「あのときのお母さんってばほんとに怖かった……あたしが悪いんだけど」

みずき
「ふふ」

SE：桜、ブランコから降りる

桜

「(降りて) ……いつまでも、こんな風に遊んでいたらいいのにな」

S E：みずき、ブランコから降りる

「ブランコくらいなら、また付き合いますよ」

桜 みずき
「それ以外は？」

みずき
「それ以外ももちろん……桜？」

S E：桜、みずきの正面に移動

桜 みずき
「……ねえ、みずき」

桜 みずき
「はい」

桜 みずき
「あたし、みずきのことが……好き」

みずき
「え？」

※短い沈黙

みずき
「あ……ありがとうございます」

桜 みずき
「……ん……それだけ？」

桜 みずき
「へ？」

桜 みずき
「……えっと、その、つまりね……軽いノリとかじやなくて、これは……」

みずきN「桜の表情を見て、私は何となくその意味を察した。好き……すき。え……好き？」

桜 みずき
「(気まずい) ……」

桜 みずき
「(小さく息を吸って) ……桜。その、す、す……き、というのは」

「うん」

みずき
「ええと……」

みずきN「『好き』を紐解こうとしたけれど、それは自分が抱いたことのない感情だった。でもおそらく、こういう場合の『好き』は、小説やドラマでよくいうところの――」

桜 みずき
「……好き、って……それは、私の……」「(恥ずかしそうに) つ……」

みずきN 「ああ、これはきっと、いわゆるそういう意味なのだ。けれど、そんな想いを向けられたのは初めてで……しかも相手が桜だなんて想像もしていなかつたから、いまいち感覚がわからない。……こういうとき、どういう反応をすればいいんだろう。私は今、どんな顔をしているんだろう……」

桜 みずき 「……あの……みずき」

桜 「桜」

桜 みずき 「は、はいっ」

桜 みずき 「ありがとうございます」

桜 「……うん」

みずきN 「……続きを、何て言おう。そもそも私は、桜をどう思つてる？ 彼女は幼稚園の時から親友で、大好きだけど……それがどんな『好き』かなんて、考えたこともなかつた」

みずき 「……」

桜 みずき 「……急に「んな」と言つて、「めん。びっくりさせちゃつた……よね？」迷惑だつた？」

みずき 「いえ、そんなことは！ ……嬉しいです」

桜 みずき 「じゃあ……！」

みずき 「でも——」

みずきN 「桜は私を好きだといった。ずっと一緒にいたいとも。けれどそれに頷くといふことは、彼女と同じ気持ちだということを認めて、なつかつこれからも彼女を自分の傍に縛り付けることになる。自分の気持ちも定まらないまま、そんな身勝手なことをするのは、彼女に対しても誠実とはいえないのではないか……」

みずき 「……そろそろ行きましょう、桜」

桜 みずき 「えつ……？」

みずき 「もうすぐ日が暮れ始めます」

S E : ブランコから立ち上がり、歩き出すみずき

桜 「あ……」

※桜、みずきの背中を見つめる

桜

「み
ず
き
…
」

3. 貴女が遠い

①美術室・文化祭

※文化祭、美術室。受付の席に座つてクロッキー帳と睨めっこしているみづき

S E ..廊下から聞こえる生徒たちの楽しそうな声

みづき 「(呟き) 植物と桜……学校と桜……美術室……んー……」
「んなのありきたり……」

みづきN 「文化祭。正直あまり興味のないイベント。だつて美術部は過去の作品を部室に展示するだけで、それを見に来るのは一部の先生と保護者くらいだ。だから私は受付に座つて、コンクールに出す作品の構想を練つているのだが……締め切りは迫つてきているのに、まったく良いインスピレーションが湧いてこない。私は桜を描きたく。けれど、桜のどんな姿を描けばいいのかわからない。それもこれも……あのことがずっと引っ掛かっているからだ」

S E ..鉛筆を置く

みづき 「(溜息) ……まだ、信じられない」

みづきN 「あれからも桜はいつも通りだつた。ちゃんと返事ができていない私に、何事もなかつたかのように接してきた。もしかしたら、あれは夢だつたのかもしれない。そんな冗談めいたことを考えながら、一日、また一日と時間が過ぎていく……」

S E ..美術室のドアが開く

桜
みづき
「みーずき！」
「桜……」

S E ..顔を上げるみづき

※桜、長いウイッグを被つてゐる

みづき 「う……その髪……どうして……」

S E .. 桜、ドアを閉める

「どう？ 似合うでしょ。ウイッグって初めて被ったけど、案外違和感ないんだね」

「ウイッグ……」

「クラスの出し物、劇だからさ。さつき本番終わつたばかりなの。みづきにも見てほしかつたなあ」

「ああ……すみません。この時間はここにいなきやいけなくて」

「いいよいよ、けど受付暇そうだね」

みづき
（小さく笑つて） 楽でいいですよ」

みづきN 「長いウイッグを被つた桜を見た瞬間から、心臓がどくどくと早鐘を打つてゐる。一瞬、錯覚してしまつた。長い髪の桜が帰つてきた気がしたのだ」

「……みづき、どうしたの？ 見惚れちゃつた？」

「ええ、そうですね」

（小さく驚く） 「……正直だね」

「とても似合つてます。（小声） それに……懐かしい」

（聞こえなかつた） 「え？」

「本当に……綺麗です、桜」

「う……うん、ありがとう。あ、そうだ、せつかくだからみづきの作品見せてよ！ 飾つてあるんでしょ」

みづき
「私のですか？ 構いませんよ」

S E .. みづき、椅子から立ち上がる

S E .. 展示パネルへ向かう二人

桜
「どんな絵なの？」

みづき
「春に描いたものなんんですけど……これです」

S E .. 二人、立ち止まる

※桜、パネルに展示されている桜の木の絵を見る

桜
「わあっ……桜だ……！」

みづき
「校庭の桜の木が印象的で、思わず筆を取つていたんです。学校の桜は三年目にしきてやつと描きました」

「凄い……三千ピースくらいのパズルにしてほしい……」

「ふふ、なんですかそれ」

「だって、それくらい綺麗なんだもん。みずき、やっぱり凄いよ……！　いつまでも見ていたくなっちゃう」

「桜にそう言つていただけだと、嬉しいです」

「うちの劇の大道具、手伝つてもらいたかったー！　この桜、イメージにぴったりなんだもん」

「……そうなんですか？」

「うん。みずきが作つてくれたら、もっとお客様に惹き込めただろうな……なんて。さすがに別のクラスのみずきにお願いするわけにはいかなかつたもんね。この絵を見られただけで満足だよ」

「……あの、ちなみに劇つて、どういう内容だつたんです？」

「あれ、言つてなかつたつけ？　えつとね、この地域のある伝承をもとにした話なの」

「へえ……」

「湖に、大きな桜の木が生えてるでしょ？　あの桜、雨が降つてもなかなか散らないことでも有名じやない。普通ならあつという間に花がなくなっちゃうのに」

「そうですね」

「それつて昔、ある男の人が、あの桜の木の下で亡くなつた恋人の前で泣き続けたからだつて言われてるんだって。それも七日間」

「七日間も……」

「さすがにファイクションな氣がするけどね。それでその人が桜を見上げて、『せめてあなたは長く咲いてくれ』つて願つたらしいの」

「恋人さんの命と、雨が降つたら散つてしまふ桜……どちらも儂いものだからこそ、その方は桜の木に祈りを込めたんですね」

「切ないよね。……ねえ、みずきはあたしが散つたら……いなくなつたら、悲しんでくれる？」

「……もちろんです」

「それ聞いて安心した」

みずきN「桜はどうしてそんなことを訊くんだろう。ずっと一緒にいたって言つていたのに。彼女の気持ちが見えるようで見えなくて、私はつい口を開いていた」

「……あの、桜」

「ん？」

「桜は、その……この間のことがあつても……いつも通りでいてくれるんですね」

みずき

みずき

「うん？」

「うん？」

みずき

みずき

「うん？」

※少しの沈黙

「す、すみません、こんなこと貴女に言うなんて……」

「いつも通り、か。ふふ」

※桜、少し辛そうに微笑んで

「あたし、変わらない？ 普段と」

「え、ええ……そう見えます」

「……みずきはさ、絵を描くとき、よく『表面だけを描きたいわけじゃない』って言つてるでしょ」

「……はい」

「人を描けば、その人の考え方や今まで経験してきたこと、風景なら数十年間の気候の影響とか、人の手がどれくらい入ったかとか、そういうことまで詰め込んでるわけじゃない？」

「そうですね……」

「じゃあ、あたしのことは？ ……あたしのことは、どれくらい知つてて、どれくらい見てる？」

「……」

「みずき、あたしはね——」

S E : 桜、みずきに近づく

「これでも結構、苦しいんだよ」

「……え……」

「みずきはするいね……あたしはちゃんと、みずきに気持ち、伝えたよ。だけどみずきは……何も、答えてくれない」

「つ……」

「本当は辛いの。あたしが言つたことは、みずきにとつてただの世間話だった？ それともぎくしゃくしたまま卒業を迎えて、バイバイしちゃうの？」

「ぎ、ぎくしゃくなんて」

「してるよ。だから、はつきり言つて……。あたしのこと、嫌い？」

「いいえ……いいえ、大好きです……！」

「じゃあその『好き』は、みずきにとつて何？」

「……それは……」

桜

「本当に大好きって思つてるなら……わたしをずっと、みづきの隣にいさせてくれるなら……わたしを、見て」

みづき
「（躊躇う） つ……」「…

※みづき、どうしても桜をまっすぐ見られない

桜
「（小さく息をついて） また、目……合わせてくれないね」

みづき
「……すみません」

桜
「あたし、本気だから。みづきのことが好きなの。信じてもらえないかも知れないし、ドン引きしてるかもしれない。だつてあたしたち、小さい頃から友達だから……。でもあたし、やっぱりみづきと、これからもずっと一緒にいたい。離れたくな

い！」

みづき
「……桜……」

みづきN 「正直、頭の中も心の中もぐちゃぐちゃだった。自分が何を思つているのか、まつたく整理がつかない。どちらにせよ、それがどんな感情であれ、定めようとする」とは今の私には耐えられなかつた」

みづき
「……」めんなさい、桜……！」

桜
「あつ……！」

SE・みづき、走り去る（美術室を出ていく）

みづきN 「だから私は、逃げる」としかできなかつた」

4. 悩める乙女たち

①桜の部屋・後悔

※桜の家、自室

桜
「(後悔) あー……」

SE：ベッドに横たわる桜

桜N
「またやってしまった。なんて自分勝手なことをしてしまったんだろう。またみづきを、困らせてしまった。彼女にとつて、とても大切な時期だつてわかつてゐるのに。でも、何もしないまま高校生活が終わつてみづきを失うかも知れないとと思うと、それは泣きそうなくらい怖かつた」

桜
「……ずっと、隠しておけば良かつたのかな。そうしたら……みづきにあんな顔させずに済んだのかな」

桜N
「公園で告白したのは、ほんの衝動だつた。今年初めて違うクラスになつて、みづきと話す時間が減つて……それでもみづきは変わらず、ひたすら絵を描き続けた。対するあたしは、みづきと会う昼休みとデッサンのとき以外は、退屈で退屈で仕方なかつた」

桜N
「夢を追いかけるみづきは眩しかつた。そしてそれは同時に、私がいかに何も持つていなかを自覚させた。夢中になれることも、特別な才能もない。みづきはあたしと違つて凄い人だし、絵を描く彼女が大好きだ。だから応援したい。でも……離れたくなかった。それでつい『一緒にいたい』と言つてしまつたけど……」

(回想：1. ずっと一緒に)

みづき
「私たちはいつか大人になる。それも、そう遠くない未来に。だから、桜には自分のやりたい道に進んでほしいです」

(回想終わり)

桜N
「みづきはあたしと離れても、夢がある。絵がある。だから平氣なんだ……あたしがいなくても」

※ S E .. 桜、枕に顔を埋める

「(長いため息) ……自分のやりたい道なんて、わからないよ……。あたし、一生大人になれない気がする……」

桜

②桜の夢・きっかけ

※ 桜の夢の中、回想。小学五年生の頃。図工室で図工の授業中

S E .. みずき、鉛筆で画用紙に絵を描いている

S E .. 桜、みずきに近づく

桜 みずき
「みーずき、ど」まで進んだ?」

「まだ下書きです。桜は?」

桜 みずき
「あたしはねー……まだ何も思い浮かばない!」

桜 みずき
「……だつたら、私のを見に来てる場合じゃないのでは? 早く描かないと終わ
りませんよ」

桜 みずき
「大丈夫だよ、図工って一時間続けてやるじやん。終わるつて」

桜 みずき
「この間もそう言つて色塗り間に合わなかつたでしょ?」

桜 みずき
「うつ……それはそうなんだけど……そんなことより! みずきは相変わらず上
手だね」

桜 みずき
「……ありがとうございます」

桜 みずき
「それ、音楽室にあるピアノでしょ? よく形覚えてるね……!」

桜 みずき
「細かいところはなんとなくですが……学校にある物を描きましょうって先生が
言つたので、描いたことのないものをと」

桜 みずき
「それで描けちゃうのが凄いよ」

桜 みずき
「ふふ、難しいですけど楽しいですよ。ほら、桜も席に戻つて描いてください。今
回こそは完成させないと」

桜 みずき
「……もうちょっとだけ見ていたいな」

桜 みずき
「え?」

桜 みずき
「みずきが描くとこ見るの、好きだから」

桜 みずき
「(やや照れる) ……そうですか……ちょっとだけですよ?」

S E .. しばらく描く音

みずき

「……あまりじっと見られると恥ずかしいです」

「あたしのことは気にしないで。幽霊とでも思つてよ」

「こんなに存在感のある幽霊はいませんよ」

「えへへ」

「褒めてません……」

みずき

SE・桜、みずきの髪に触れる

「……みずきってさー、幼稚園の時からずつと髪短いよね」

「どうしたんです、急に……まあ、確かに伸ばしたことはないかもですね」

「それってなんで？ こだわり？ 長いとヘアアレンジとかできるよ？」

「興味がないわけではないんですけど……長い髪だとお手入れが大変ですし、お風呂あがりに乾かすのにも時間がかかりますし……」

「ああ……」

「それに、髪の毛に絵の具が付いて、絵を汚してしまってももしれません」

「……なるほどね。（笑い交じりに）みずきらしいや」

「そうですか？」

「うん。あたし、みずきのそういうところ好き」

「……ありがとうございます。私も、桜のたまに訳がわからないところ、好きです

よ」

「（笑いながら）何よそれー！」

桜

※夢（回想）終わり

SE・布団から顔を出す桜

「（目を覚ます）ん……あ……寝ちゃってた……？」

桜

「懐かしい夢を見た。小学校高学年くらいのことだ。絵を汚さないために髪を短くしているとみずきから聞いたあたしは、少しでもみずきに近づきたくて……翌日

には髪を切り、それから一度も伸ばしていない」

SE・腕を伸ばしてサイドテーブルからスマホを手に取る

N

※スマホの画面を確認した桜

桜
「……通知、来ないな」

③みずきの部屋・思い出

※数日後、みずきの家、みずきの部屋。机でクロッキーと睨めっこしているみずき
みずきN「美術室での一件以来、私と桜は会わなくなつた。お昼休みや放課後に桜が来る」とも、私から迎えに行くこともなかつた。それもこれも、私がいつまでも悩んでいるせいだ。今日はついに学校を休んだ。いわゆるサボりだ。コンクールの作品をどうにかしないといけなかつたというのもあるけれど、こんなときに学校でばつたり桜に会うのが怖かつたのだ。もう桜のことを、傷つけたくなかった

S E .. クロッキー帳を閉じる

みずき
「駄目……やっぱり描けない……」

みずきN「桜に会えない日が続くにつれて、桜を描こうとする手がさらに進まなくなる。ただでさえアイデアが浮かんでこないので、これではコンクールなんてとても――」

S E .. 鉛筆を床に落とす

みずき
「あつ、もう……」

S E .. 椅子から下りて屈むみずき

みずき
「よい、しょ……あら？　これは……」

※机の隣の棚の一一番下にアルバムを見つけるみずき

S E .. 棚からアルバムを取り出す

みずき
「……幼稚園のときのアルバム……こんなところにあつたんだ」

S E .. みずき、椅子に座る

S E .. 机の上にアルバムを置き、開く

みずき 「わあ、懐かしい……！」

みずきN 「日に焼けて色褪せたアルバムには、小さかつた私たちがいた。もう名前を忘れてしまった子も大勢いるけれど、それでも私が写っている写真には、隣に桜の姿が必ずといっていいほどあった」

みずきN 「彼女に出会う前は、絵を描いてばかりの私に誰も話しかけようとはしなかった。

私も、絵が描けるなら友達なんていらないと思っていた。けれど……桜はそんな私に、光をくれた。今もあまり人と話すのは得意じやないけれど、桜がいてくれれば、私はそれで充分だった」

みずき 「依存、してますかね、こんなの……。だったらやつぱり、これ以上私に付き合わせるのは——」

S E .. ページをめくると、一枚の画用紙が挟まっている

みずき 「なんでしょう、これ……？」

S E .. 折られた画用紙を開く

みずき 「(驚く) っ……！」

※画用紙は、みずきが初めて桜を描いた絵

みずき 「……ふふ……へたっぴな絵……」

みずきN 「それは、私が初めて描いた、桜の絵だつた」

※同じくして、学校の廊下

SE..廊下ガヤ、足音など

S E … 階段を下りる桜

（溜息）…………今頃みずき、コンクールの作品描いてるんだろうなあ。
お星、ちやんと食べてらかなな……無茶して倒れなきやいいけど……」

S E ..廊下を歩く桜

桜N
一頭の中は、常にみずきのことでいっぱいだつた。あれから何度も連絡しようとし

「一頭の中は常にみすきのことついでいた。あれから何度も連絡しようとしたけど、どうしてもできなかつた。拒絶されることも、気を遣わせることも怖かつた。あたしはいつの間に、こんなに憶病になつてしまつたんだろう」

「つて、あ……」

「あたしはいつの間にか、美術室の前に来てしまっていた。今日も真っ直ぐ帰ろう

「あたしはいこの間にか美術室の前に来てしまっていた。今日も真っ直ぐ帰ろうとしていたのに、みずきのことを考えてたから……。この間デッサンの練習に行かなかつたのもあつて、今は特に会いにくい」

「……でも、謝らなきやだよね……みずきが気にかけて絵が進んでない可能性だ

〔E〕：蝶、ドアこ手をかねる

「し、失礼します！」

S E .. 桜、ドアを開く

「中に入ると、知らない顔の人たちが十人ほど並んでキャンバスの前に座つてい

た。でもみずきの姿は見えない。あたしが尋ねると、部員である彼女たちは、みずきは今日、学校を休んだと言った」

「失礼しましたー……」

S E .. ドアを閉める

S E .. 廊下を歩きだす桜

「みずきが、学校を休んだ。もしかしてあたしのせい？　あたしが追い詰めてしまったのだろうか。だとしたら、とんでもないことをしてしまった。あたしはみずきの絵を描く時間も楽しみも奪いたくなんてなかつたのに……」

S E .. 足を止める桜

桜
N

「明日は、デッサンに付き合う日。前にみずきが、コンクールに応募する前の最後の練習日だって言つてた。みずきにとつて貴重な練習だ。ここであたしが行かなかつたら、あの子は何をデッサンするんだろう。それに精神面だつて不安だ。コンクールの絵は完成するんだろうか。色んなことが脳裏を駆け巡つて……その中でふいに、一つの疑問が浮かんだ」

桜
「みずきは……何の絵を描いてるんだろう？」

桜
N

「そうだ、あたしはみずきの絵が好きだ。絵に真っ直ぐなみずきが、好きだ。それなのにあたしは、自分が気持ちを伝えてすつきりしたいからつて、告白なんてして……」

S E .. 再び歩き出す桜

桜
N

「また、間違えてしまうかもしない。でも、あたしが今、みずきにしてあげられることは……」

S E .. 足音FO

5. 内側を覗けば

①美術室・再会

※翌日、放課後の美術室。みずき、席に座っている

S E .. スケッチブックを開く

みずき 「……今までたくさん、描いてきましたね……」

みずきN 「今日はデッサン練習。桜は来てくれるだろうか。先日の練習では、彼女は姿を見せなかつた。もしかしたらもう、一度とーとんに来ることはないのかも知れない」

S E .. ページをめくる

みずきN 「中学でも高校でも、桜は私のモデルになつてくれた。高校では部員じやない生徒を部室に入れるのは控えるよう言われてしまつたため、先生に交渉して、部活のない曜日に美術室を開けてもらうことになった。だからこの時間はいつも、私と桜、二人だけの時間。一人きりの、かけがえのない時間だつたのだ」

S E .. 壁時計の針が動く

みずき 「……時間、過ぎちやつた」

S E .. スケッチブックを閉じる

S E .. 椅子から立ち上がるみずき

S E .. 美術室のドアが開く

桜 「みずきっ！」

S E .. 桜が入つてくる

みずき 「(驚く) 桜……來てくれたんですね」

桜 「……今日は……來なきやと思つて」

みずき 「(安心したように微笑む) ……ありがとうございます」

桜 「……えつと……」

みずき 「……」

「は、早く描いて！ 時間なくなっちゃうよ」

みずき 「は、はい。そうしましよう」

S E.. 桜、みずきの右隣の席に移動して座る

桜 「……今日は、どんなポーズがいい？」

「……では、私を見ていてください」

桜 「えっ？」

桜 「真っ直ぐ私を見つめて、そのままでいてください」

桜 「……わかった」

S E.. みずき、スケッチブックをめくる
S E.. みずき、鉛筆で描き始める（継続）

桜 「……喋つてもいい？ 動かないから」

「ええ」

桜 「コンクールの作品、どんな感じ？」

「……実はまだ、描き始めてないんです」

桜 「えつ……ほんとに？」

桜 「残念ながら」

桜 「……間に合いそう？」

桜 「明日から描けば、なんとか」

桜 「そつか……（訊きづらそうに）何描く予定なの？」

みずき 「（答えようか迷つている）……」

桜 「あー……楽しみにしてる。完成したら見せてよね」

みずき 「ええ」

※しばらく描く音が続いて

桜 「……みずき」

「はい」

「この間は『めん』」

みずき 「（微かに戸惑う）……いいえ。私のほうこそ……『めんなさい』」

桜 「大事な時期だつてわかってるのに、自分勝手だった。……もし、コンクールの絵
が描けない原因が、あたしだつたら……」

S E … 描くのを止める

みずき 「いえ！ ……そんな、りんば」

桜
「そんなこと、あるでしょ?」

みでま
一
機に
悪くない人で

「それは……」はうがなゝは二

みずき
「.....
桜」

桜 「なあに？」

みすき
—私は
桜と出会って
—結婚

「だからこれから先、何があつ

つて います。 そう、 願いたい

桜
—うん

手を止めてま
ません

S E ..みずき、再び描き始める（継続）

みずき 「桜を描くのは、これで何度目でしょうか。デッサンの練習をするときは、いつも手伝ってもらつてましたね」

桜

見つけたんです。幼稚園の

桜一へえ……！」

「ええ。骨格は歪んでて、頑

た……ですが、私にはあの絵が、今まで描いた中で一番純粋なものに思えました

「…………あたしも…………あたしも、あの絵が好きだったた。驚いたの。みづきが描いたも

よつと焦つたけど、喜しかつた

みづき 「……そんな風に思つててくれたんですね」

（…………）めざまが望むばかり、あとの二三が兼ねて、唯これにて大丈夫だ。（…………）

し……もしみすきか望むなら
あたしのことが嫌なら
離れたって大丈夫だから】

S E .. 桜、手を止めて鉛筆を置く

みずき 「終わりました」

「……見せてもらつてもいい?」

みずき 「どうぞ」

S E .. 桜、スケッチブックを覗き込む

みずき 「ふふ……やつぱり凄いや、みずきは」

「モデルがいいからですよ」

みずき 「まあね」

桜

みずき

S E .. 桜、姿勢を戻す

桜

みずき

「……桜」

桜

みずき

「私……東京の美大に行こうと思つてます。絵を本格的に学びたいんです。そして、画家になる夢を叶えたい。だから……」

※少しの沈黙

桜 「……知つてた。前に家行つたとき、部屋に資料置いてあつたし。それに画家になりたいっていうみずきの気持ちは本物だつてわかつてたから」

（驚きと安堵） 「……そ�だつたんですね」

桜 「なんで言つてくれないんだろうって思つてたけど、あたしが寂しがるつてわかつてたからなんだよね」

みずき 「いえ、その……どちらかというと、私のほうが

「え?」

「私が、寂しかつたんです。桜と離れるのが」

「……で、でも、みずき……あたしのやりたい道に進め、つて」

「それは……だつて私といたつて、桜のためにはならないじやないですか……」

（小さく驚く） 「……」

桜 「……ずっと貴女を描いてきて、ずっと貴女を隣で見てきて……私だつて、貴女を

みずき 応援したいんです。それだけは、伝えておきたくて」

SE..学校のチャイム

みずき 「……下校の時間みたいですね。今日は職員会議があるから早いって言つてまし

た」

「(小声) あ……あたし……」

「はい?」

「みずき、家に帰つて絵描くんでしょ!?」

「え、ええ。ラフだけでも詰めたいので」

「あたしも……行きたい!」

みずき 桜 みずき

②美術室・スケッチブックの中身

※時間経過。美術室を片付けている二人

SE..片付ける音

みずき 「……」

「……」

「ねえ……嫌じや、ない?」

「何がですか?」

「あたしが家に行くこと」

「嫌なんかじやありませんよ。今までだつてよく来てたじやないですか」

みずき 桜 みずき 「……ありがと。あの、みずきはさ……あつ」

SE..桜、机にぶつかり、スケッチブックの中の紙が散らばる

桜 みずき 「ごめん!」「あ、私が……!」

SE..しゃがみ込む桜

SE..桜、落ちている紙を手に取る

「……れつて」

桜

※紙はすべて桜をスケッチしたもの。すべての髪が長く描かれている

桜 「みずき……」

S E .. 桜、立ち上がりつてみずきを見上げる

※みずき、顔を赤らめる

みずき 「う……見ました?」

桜 「……うん」

※しばらく沈黙

みずき 「……か、片付け、早く終わらせないとですね」

S E .. みずき、紙を拾い集める

桜 「うん。あ……こっちにも落ちてるよ」

S E .. しゃがむ桜

S E .. 手が触れ合う

桜 「あつ……」

みずき 「つ……」

桜 「う」、「う」めん……手……」

みずき 「いえ……ありがとう」

S E .. みずき、紙を回収し立ち上がりつてスケッチブックを机に置く

みずき 「あの、私、家に持ち帰る画材取つてきます。すみませんが、カーテンを閉めておいてもらいますか?」

桜 「わかった」

S E .. みずき、隣の部屋（美術準備室）へ駆けていく（ドア開閉）

S E .. 桜、立ち上がる

桜 N

「今までスケッチされた私は、どれも髪が長く描かれていた。小学生のときに切つてから、一度も伸ばしていない髪。みづきとお揃いの、短い髪。でも、みづきはそれを嫌っていたのだろうか。それとも、今があたしより、昔のあたしのほうが……」

桜

「(自嘲気味に笑つて) あたし……みづきのこと好きすぎでしょ」

S E .. 桜、窓へ近づく

「もう、面倒だなあー……十年以上の付き合いなのに、今さら「んなことになるなんて」

S E .. カーテンを閉める

「えっと、あっちも閉めないと……」

桜

S E .. 桜、移動して

S E .. カーテンを閉める

桜

「(気づく) ん?」

※ 桜、美術室後方の棚に何かがあるのを見つける

S E .. 棚に近づく

桜

「これ、文化祭のときに使ったウイッグ……置きっぱなしにしてたんだ」

S E .. 桜、ウイッグを手に取る

桜

「……長い髪、か」

S E .. ドアが開き、みづきがやつてくる

桜 みづき
「お待たせしました」
「あつ……うん！」

S E .. 桜、ウイッグを背に隠す

桜
みずき
「じゃあ……行こつか、家」
「はい」

SE.. 桜とみずき、机のほうに移動して鞄を手に取る

桜
みずき
「……」

SE.. 桜、鞄をそっと開けてウィッグをしまう

桜
みずき
「どうしました？」
「う、ううん、何でも」

SE.. 鞄を閉める

6. キャンバスにのせる

①みずきの部屋・みずきの気持ち

※みずきの家、みずきの部屋

S E .. ドアを開け、部屋に入る一人

桜 みずき 「お邪魔します」

「荷物、適当に置いてください。私はお茶の用意をしてきます」

桜 みずき 「あ、ううん！ ただいいだけだからおかげなく。絵の邪魔もする気ないし」

「お客様をもてなさないなんて、私が嫌なんです。それに……たまには一緒にお茶

もしたいですし」

桜 みずき 「あ……ありがとう」

「じゃあ、待つててくださいね」

S E .. 部屋を出していくみずき

桜 「……氣、遣わせちゃったかな。いや、みずきはもともとそういう子だったか」

S E .. 桜、カーペットの上に鞄を置いて座り、中からウイッグを取り出す

桜 「あたしが……あたしが、みずきの望む『昔の桜』だったら、傍に置いてもらえるのかな……なんて」

S E .. 桜、ウイッグを被る

S E .. ドレッサーの前へ向かう

※鏡と向かい合う桜

桜 N 「……そういえば、小さい頃はこれくらいの長さだったかも」

「さつき美術室で過去のスケッチを見たとき、一瞬ウイッグを被ったあたしを描いたのかと思った。だけど、髪はどこか不自然に書き足されていて……だからもししたら、みずきはずっと前から、幼稚園の頃のあたしのことを考えていたのかもしれない」

桜

「どちらにしても、こんなことしたって、もうみずきは……」

※お茶とお菓子を持ったみずきが入ってくる

S E .. ドアが開いてみずきが入室

みずき
「桜、お茶を……（桜の髪に気づく） つ……！」

桜
「あ……」

S E .. みずき、ゆっくりと歩く

みずき
「桜……」

桜
「ど、どうかな？」

みずき
「……」

桜
「な、何か言つてよ……」

S E .. みずき、机上に盆を置く

S E .. みずき、桜のほうを向く

みずき
「……凄く、似合つてます。文化祭のときのウイッグですね」「そうだよ……」

※少しの沈黙

桜
「……やつぱりみずきは、昔のあたしのほうが良かつた……？」

S E .. みずき、桜のウイッグに触れる

みずき
「長い髪……あの頃にそつくりです。綺麗……。ですが……」

S E .. みずき、桜のウイッグを取る

みずき
「……これは没収です」「え？……」

※SE：みずき、ウイッグを机の上に置く

※きよとんとしている桜を見て笑うみずき

みずき
「もう、んなもの、いりませんから」

桜
「で、でも、みずきは……」

みずき
「（人差し指を桜の唇にあてる）しー……せつかくなので、もうちょっとだけ練習、

付き合つてください」

桜
「え……」

桜
「座つて」

桜
「（何が何だかわからない）……」

SE：桜、クツシヨンの上に座る

SE：みずき、机の棚からスケッチブックを取り出し、ペンと共に持ってきてクツシヨンの上に座る

みずき
「そのまま、動かないでくださいね」

桜
「（過去を思い出す）あ……」

(回想：プロローグ)

SE：桜、みずきの右側の席に座り向かい合う

桜
「これでいい？」

みずき
「そのまま動かないで」

桜
「う、うん」

SE：みずき、画用紙にクレヨンで描く（継続）

桜
「……もしかして、あたしの」と描いてるの？」

みずき
「動かないでください」

桜
「むー……」

(回想終わり)

SE：みずき、鉛筆で描き始める（継続）

みずき
「私、コンクールでは……桜、貴女を描こうと思つてます」

「えっ、あたし？」

「ええ。やっぱり、私が代表作として描きたいのは、桜ですから」

「そ、そつか……なんだ、照れちやうな……けど、このままでいいの？」みずきは、

髪が長かったあたしのほうが……」

みずき 「……確かに私は、長い髪の桜がとても好きでした。ですが、桜に告白されて、あまり会えなくなつて、昔の絵を見返して……私の幼馴染で大切な人は、今の桜だと気づいたんです」

「みずき……」

みずき 「もちろん、昔の桜も好きですけどね。今の貴女は、もっと好きです。だから今は

……そのままの貴女を、描かせてください」

「（感激）っ……！」

みずき 「ふふ」

桜 「……みずき……そのままでいいから聞いて。……あたし、みずきにそう思つてもらえて、嬉しい。（涙ぐみ始める）あのままみずきと離れ離れになるんじやないかって、不安で……そんなの嫌で……でも、あたしの気持ちは、押し付けていいものなんかじやなくて」

みずき 「押し付けられたなんて思つてませんよ。それに……私も同じです」

「え？」

桜 「動搖して、焦つて、悩んで、苦しくなつてしまふくらい……貴女のことを、大切に思つています。正直、これが恋なのかはわかりません。ですが……このあたたかな気持ちを、これからも……大事にしたい」

桜 「うん……。ねえ、あたしも正直に言つていい？」

みずき 「はい、この際全部言つてください」

桜 「あたし、自分のやりたいこと、まだわかつてない。けど、絵を描くみずきの傍にいたい。その上で、あたしのやりたいことを見つけに東京に行きたい。それじゃ……だめ、かな」

S E ..みずき、手を止めて鉛筆を置く

みずき

「……私が絵を描き続けられたのは、個人的な趣味だけではなく、桜がいつも隣にいてくれたからです。ですから、貴女が自分自身も大切にしてくれるなら、私はそれを喜んで受け入れます」

桜 「……今さらなんだけど、あたし……みずきに釣り合う人間じやないよ。あたしはみずきと違つて、何も持つてない」

みずき 「比べるものじやありませんよ。それに桜こそ、私が持つていらないものをたくさん持つてます。だから、これからも一人で……」

桜

「泣ぐのを我慢している）……ありがとう、みずき……」「

S E：みずき、桜にゆっくりと顔を近づける

みずき
「桜……」

S E：みずき、桜の頬に手をあてる

みずき
「うん……」

みずき
「好きですよ……（頬にキス）」

桜
「……（抱き締める）つ……」

S E：桜、みずきを抱き締める

みずき
「（微かに驚き、微笑む）……桜は、あたたかいですね……」「

みずきN「誰もが憧れる桜を、私が独り占めしてしまっていいのだろうかと、ずっと悩んできた。そのことに対する罪悪感と寂しさから、つい昔の桜に会いたくなってしまつたのかもしれない。いつだつて、桜は桜だったのに」

みずきN「私を包み込む彼女の体温は、とても心地が良かつた。そう……まるで、桜の花びらと寄り添つたみたいに――」「

エピローグ

①電車内・新生活

※翌春。みずきと桜、電車内で座っている

S E .. 電車走行音（継続）

「……ねえ、あと何分？」

「まだ四十分しか経っていないですよ」

「うそ！ もう飽きたー！」

「桜、電車の中ではお静かに」

「だつてーーー乗り換えまでまだまだかかるじやん。やっぱ新幹線にすれば良かつたかなー」

「交通費節約しようって言つたの、桜じゃないですか」

「そ、そうだけど……ほんと、東京つて遠いんだねー」

「ですね……今から楽しみです」

「……うん、あたしも楽しみ。これからは華の大学生活だーーー！ 遊ぶぞーーー！」

「遊ぶのもいいですけど、お勉強もちゃんとしてくださいね。あと、家事も分担しますから」

「へへへ、みずきと一緒に住めるなんて嬉しい〜」

「聞いてますか？」

「ます！ シェアハウスなんて幸せすぎる……」

「もう……ふふ」

桜 N

「三月。あたしとみずきは、揃つて上京することになった。みずきは第一志望の美大に合格して夢に一歩近づき、あたしは自分のやりたいことを探すために大学に入ることにした。みずきのように夢中になれることに出会いたいと、今は前向きに思える。みずきと一緒になら、きっと見つけられる。そんな気がするのだ」

S E .. みずき、桜の髪に触れる

「……なあに？ 髪に何かついてる？」

「いえ、相変わらず綺麗だなあと思いまして」

「（照れる）えつ、あ、ありがとう……」

「伸びてきましたね」

桜
みずき
桜
みずき
桜
みずき

「そうだね、まだほんのちょっとだけ」「

「どれくらい伸ばすんですか？」

「んー、まだ未定。けど、長い三つ編みできるくらいまで伸ばしてみようかなあ」

「三つ編みですか？ 珍しいですね」

「幼稚園の頃、よくあたしの髪結んでくれてたでしょ。またやつてほしいなって思つて」

「（微笑んで）三つ編みでもポニーテールでも、何でもりますよ。桜のためなら」「ふふ」「

桜 みずき

桜 みずき

※少しの沈黙

桜 みずき

桜 みずき

桜 みずき

桜 みずき

「……ねえ、手、繋、うよ」「

桜 みずき

桜 みずき

「うん……ダメ？」

桜 みずき

桜 みずき

「ひ、人目があるところではその……恥ずかしい、です」

「……そつか。ま、こういうのはちよつとずつやつていけばいいつか。あたしは今
のままで充分幸せだし」「

「うう……」

桜 みずき

「みずきちちゃんは可愛いなあー」「

S E：みずき、桜の手をとる

桜 みずき

桜 みずき

桜 みずき

桜 みずき

「いや、それはわかるけど」「

「……わ、私だって、桜とこうしたいって思つたんですね！」「

（照れる）つ……」

桜 みずき

※みずき、余裕のない桜の表情を見て面白がる

「ふふ……桜は本当に可愛いですね」「

「（）……こにやろー！」

桜 みずき

S E：桜、みずきの脇腹をくすぐる

みづき

「(笑いながら) ちよつ、やだ、あははっ、やめてくださいっ……！」

「まいっただかー！」

みづき
「やつ、ははつ、ふふ、もう……！」

桜
「ふふっ」

桜N

「電車がトンネルを抜けて、知らない町を走っていく。この世界は、まだまだあたしが知らないことだらけだ。でも、あたしは確信していた。東京で見られる景色も、生活も、みづきが隣にいればきっと楽しい」

※窓の向こうを見るみづき

みづき

「あ、見てください。桜が咲いてますよ……！」

桜
「どれどれ？ あつ、ほんとだー！」

S E .. 電車走行音 F O